

東ポリネシアから消えた文化遺産

—消えたチャント—

畑 中 幸 子*

The Disappearance of Cultural Heritages in Eastern Polynesia

—Lost Polynesian Chants—

Sachiko HATANAKA *

Reao-roa taha ia
はるかにのびるレアオ

taha ia te uru
東風に向ってはるかにのびる

taha ia i te rae
岬はるかに

tei raro i te au o Niu-tu
南への潮路で

tei raro i te au o Tetagi ia
北への潮路で

ka hotu, ka hara, ka tu, ka moe
椰子の実が辿りつく、ここに安らぎをえよう

te igoa o taku fenua
わが島の名はレアオ

ko Reao-roa taha ia.
はるかにのびるレアオ

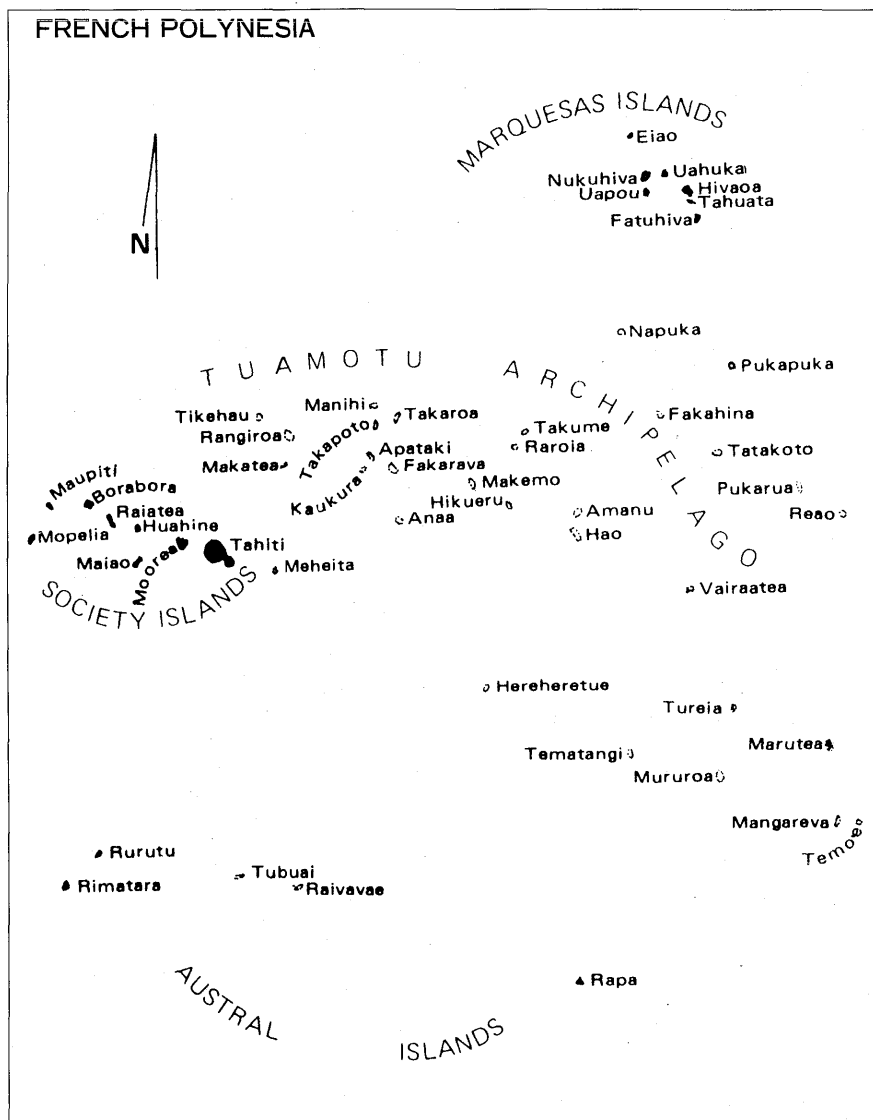
はじめに

1961年にポリネシア研究を始めて以来、体系的な宗教をもたない無文字社会の人々と文化遺産の関係がいかに脆いものであるか痛感してきた。21世紀を目前にした地球上の人々は失なわれていく文化を惜しむいとまもなく新しいもの、より豊かさを求めてきた。

東ポリネシアの多くの島々は西欧文化に接して以来100年~200年という時間が経ている。巨石文化 (megaolithic culture) の遺跡は一部復元され残されたものの、ポリネシア人の最も重要な

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

財産であり、民族のアイデンティティにもなっていた遠洋航海用のカヌーはもはや消えてしまった。無文字民族にとってチャント（詠唱歌）は民族の叙事詩であり、祖先への讃歌、挽歌、祈願、英雄讃美、物語である。文化変容をおこし、伝統的なものが何も残っていない所でチャントが20世紀後半まで残っていたというのは、チャントの社会的通俗性と感情表現の意義が人々をひきつけていたからであろう。ポリネシア人は生来、歌うこと、踊ることの好きな民族であるが故に土語（ポリネシア方言）が失なわれようともチャントは人々に愛され、歌い続けられてきた。



1962年、筆者は仏領ポリネシアのツアモツ群島プカルア環礁で偶然、古老たちが歌っているチャントを聞いた。研究課題に追われていた筆者はチャントの重要性に対する認識が足りなかった。

プカルア島の調査で島民の祖先が30マイル離れているレアオから移住してきたことがわかった。

1976年から“東ツアモツ群島へのポリネシア人の移住に関する研究”課題の下でレアオで学際調査を始めることになった。1976～80年の間、レアオで120余りのチャントを収集した。核実験のため、時にはレアオへの渡航が不可能になり、単身タヒチでレアオで録音したチャントの転写にかかったこともあった。幸いなことに1934～56年までレアオのハンセン氏病療養所で働いていたタヒチ人看護夫ピエール・フィウ氏を助手に作業を始めることができた。フィウはマンガレバ島の調査の帰途、レアオに来たピーター・バックと三か月間生活を共にしていた。1935年のことである。ポリネシア研究に既に偉大なる業績を残していたマオリ族の血をうけたバックからフィウは、ポリネシア文化に関して薫陶をうけた。フィウはレアオの過去に興味を抱くようになり、当時の古老の話を記憶に止めていた。レアオに関する最後のインフォーマントともいえる。

レアオで予期せずして多くのチャントを録音したものの、その言葉は死語になっていた。詠唱できるのは10指にみえない古老で、テキストの主題が言えても逐語訳はできなかった。レアオ調査より15年溯ったプカルアでのチャント収集時に比較して、レアオの古老たちのテキストに対する記憶はかなり曖昧なものになっていた。20年余りの苦闘の末、ポリネシア語の多くの方言辞書を利用してテープ録音の転写と翻訳を終えた。ポリネシア語の研究歴50年以上のS. エルバート教授の来日を機会に二か月かけて共に検討したが、満足できる結果に至らなかった。

従来のポリネシア研究の中でチャントの研究は特別に取り上げられることはなかった。民族誌やモノグラフの中で音楽として、あるいは伝承として記述されているにすぎない。文化遺産のほとんどを失くしてしまった今日では、チャントはポリネシア文化研究の一次資料として大きな価値をもつことになった。南太平洋は18世紀半ば以来、ヨーロッパ人航海者、宣教師、捕鯨船、商社と相次ぐ来島により文化変容がすさまじい勢いで進んだ。ポリネシア東端の辺境であるプカルア・レアオで風前の灯とはいえ、チャントが残存していたことはこの地理的な孤立に負うところが大きい。多くの島々からチャントが姿を消したことは、人々が彼ら自身の方言を急速に失くしていったこと、外来の文化が入り自身の文化にもはや関心も愛着もなくなったことによるといえる。

1997年、筆者はレアオ島のルーツを探した。仏領ポリネシアの首都タヒチの裁判所には19世紀初めから島民の戸籍が保管されてきた。ユニークなレアオ島民の名前に着目し、ソサエティ諸島、マルケサス諸島、オーストラル諸島、ツァモツ諸島、ガンビエル諸島など全群島の戸籍カードを調べたところ、ガンビエル諸島のマンガレバ島とアカマル島に限って古い時代にレアオ島民と同姓が多くみられた。一方、レアオ島民の系譜で5～6世代溯ると、先祖にマンガレバ生まれが多かったことが思い出された。こうしてレアオ島民のルーツが示唆されたので、翌1998年、古い方言の残存を期待し、マンガレバに出かけた。仏領ポリネシア自治政府設立と核実験停止により、タヒチから直線距離にして1600km 離れているマンガレバへ民間機が週一便であるが利用できるようになっていた。タヒチのカソリック大司教の話ではマンガレバ方言を話す古老が4～5人いるということであったが、それは *lingua franca* により生まれた新しいマンガレバ方言であった。

古老たちにチャントのテープを聞かせたところ、彼らが子供の頃に聞いた言葉で祖父母が歌っていたチャントだという。1929～31年のビショップ博物館のツアモツ群島の調査隊のメンバーであったピーター・バックは1934年、マンガレバに調査に戻った。彼が土着の人々から口碑伝承や民族誌の資料をえた頃を最後に、急速に島の土語が失なわれていったことが判明した。

一方、レアオでは、もはやチャントを謳える者が一人もいなくなった。辺境の地にあつて、どのような社会状況がどのようにして民族の文化遺産を消滅させたのか、筆者は関心を抱かされた。最後に、消えた文化遺産チャントについて紹介すると共に、島の歴史を通して消滅の背景について考察したい。

レアオのチャント

無文字民族にとってチャントは口碑伝承の中で重要なものである。口から口へ、口伝えは途切れることなく、また多くの物語が散文になって歌われていたため、文化遺産の中で最後まで残存したといえる。しかし、プカルア・レアオ両島で収集できたチャントは先祖が歌っていたものとは同一ではない。20世紀に入り他島の方言に言葉が替えられたり、メロディーが讃美歌の影響を受け改められた部分があることは否定できない。

チャントの中には神話、あるいは歴史的な物語からの挿話に関係しているものもあるため、失くなってしまった文化要素を知る手がかりを与えてくれる。このことはポリネシアの多くの島々でいえることである。ポリネシアの島々にきたキリスト教宣教師たちは、異質の文化背景の下で発達した宗教をポリネシア人社会に導入し、且つそれ自身の文化価値をもたらしした。ポリネシア人の神々の死ははかり知れないほどの変化をポリネシア人社会にもたらしした。それは宗教から始まって社会の解体にまでおよび、口碑伝承、芸術、技術の破壊にまで迫った。キリスト教の到来前は、神々とその名が部族を表す名祖の間に系譜関係が存在していた。⁽¹⁾チャントの中から伺い知ることができるのである。

チャントの構成は言葉の大部分が二重の意味、つまり曖昧な表現と隠された意味から成っている。後者は非常にエロティックな意味をもつという。⁽²⁾ プカルア・レアオのチャントはビショップ博物館ツアモツ群島調査隊のメンバーであったE. G. バローがツアモツ群島の多くの島で集めたほど種類はない。共通にある種類はファグ (fagu)、ファカテニ (fakateni)、ファカタラ (fakatarā), ファカアリキ (faka-ariki), ロゴロゴ (rogorogo) である。レアオにはその他、タラバ (tarava), パリパリ (paripari), パタウ (patau), ペヘトロ (pehetoro) がある。

チャントは社会的機能に従って分類されている。チャントにつけられた本来の名称のいくつかは日本語、あるいは英語の意味に一致させることが困難である。大意が容易にえられても、一語一語の訳はその適当な言葉を見出すことが殆ど不可能である。島民からチャントの大意が聞かれるものは混成語で歌われているものに限る。レアオのチャントは調子や韻律の抑揚要素が非常に単純で朗読と音楽そのものとの間にあり、どっちつかずである。

レアオのファグはツアモツ群島の他の島々のファグとは音楽的には全く異なっている。10余りの短いスタンザから成り、各スタンザの語は主題（主に人名）に続いて数のみが変わっているのである。ファグは神々、英雄、故郷について詠唱される儀式ばった厳粛なチャントが多い。亡くなった者への哀歌、挽歌もファグに属している。その言葉が神話的な主題に及んでいる時でさえ、これらのチャントは普通、超時間的な情緒内容である。レアオに残っていたファグの多くは挽歌である。挽歌は合唱で歌われるが、歌の第一人者がリードするのが普通である。神々の世界を歌うチャントに至っては、古老たちも大意を述べることすら容易ではなかった。万物の始まりに遡り、起源を神まで辿っていく。移住者の祖先たちは神につながるのである。ファグの例を以下に挙げる。

fagu 1.

Ka tahi nei ka taea Ria e
no te fare i motu
ruru na te tagata
na Nihitu, na Tuhoe, na Tehakukiri
te igoa te vaka ko te Kaha-mata-tini
ka kave ki uta, ki uta te fenua
ki uta Tearero
ka tau metua, ko Teao,
ko Tetama, ko Teahuotoga
haka ara ko te mata, te mata o te atua
ko Tetauira, ko Temiki, ko Tepirianu
ko Tetaehaeia, ko Tetaimaeva
ko Tetairutua, Temoko-inutai
ko Tematahao i i.

はじめにリアがあらわれ
木を伐り 家をたてる
人びとがつどいくる
ニヒツ、ツオエ、テハクキリ
カヌーの名はカハマタチニ
岸に押し 陸にあげる
テアレロのマラエまで
祖先が天下る
テアオ テタマ、テアフオトガ
目ざめよ、神々の眼
テタウイラ、テミキ、テピリアヌ
テタエハエイア、テタイマエバ
テタイルツア、テモコイヌタイ
テマタハオよ

fagu 2.

Tui ko koia tera uke rahi take
ka mate te rahi i raro a huri
oro oro komo hoi tana rua
ahu ake ahu ake toro ku tana
tuki ake papa
ahu ake ahu ake noho ru
e ri e ro.

一条の光りが闇の空からいでぬ
古い墓場に死が安らぐ
墓場からかすかな水のささやき
黄泉の国へ、黄泉の国へ
しじまのひろがる闇に安らぐ
黄^よ泉^みの国へ、黄^よ泉^みの国へ
安らぎを求めん、あゝ、あゝ。

fagu 3.

Turinatoriki ma te mate noa e	あゝ、幼な子が逝った
e tiu atu hoki ei tua	はるかなる国へ
i te maru no Havaiki e	ハワイキの闇の中に
Turinatoriki ma te mate noa e	あゝ、幼な子が逝った
kapokapo ra a te manava aue e	つきせぬ歎き悲しみよ
garo te tama i garo	いとし子が去っていく、あゝ
garo ki te ara taku e	去っていく、はるか彼方へ
ua garo te tama e	いとし子が去ってしまった
anoano ra a Havaiki e.	はるかなるくに、ハワイキへ。

fagu 4.

Ka tahi ki ruga o ruapo	闇の世界の上方から一つ
fatifati nuka i mavae rahi	ひだが破れだし、天空がひらく
e muri vahine no te tio, te tio	後向いている女のお尻、お尻がでる
ka maraga nanu te tio, te tio	お尻がもち上り、動きだす
e ri e ro.	あれよ、あれよ。

チャントの歌い出しは一人のフア hua と、もう一人の答える者で始まり、時には高音部を歌うマロ maro がいて、他の者が合唱で続くという形式をとるものが多い。レアオには火を作るときのチャントが豊富である。ピエール・フィウによるとこれはファカタラかファカテニに属するといふ。E.S.C. ハンデイ (1927) によると、ポリネシア人の生活においてチャントの重要な機能は呪文や祈願に力を加えることである。

fakateni

Mata mate kau nati, mata mata kahi	火をおこそう、木粉がでだす
ko te ahi aru, ka tutu ha maru	木に火がつく、そっと移そう
tui te tumu rei, ua kite au mata mata	火つけ木をおいて、さあ、しめた
mata mata toko rau mea, mata mata kahi	北に向って粉がとぶ
ko te ahi aru, ka tutu ha maru	木に火がつく、そっと移そう
tui te tumu rei, ua kite au mata mata	火つけ木をおいて、さあ、しめた
mata mata toga mea, mata mata kahi	南に向って粉がとぶ
ko te ahi aru, ka tutu ha maru	木に火がつく、そっと移そう
tui te tumu rei, ua kite au mata mata	元の木をおいて、さあ、しめた

ファカタラは土地、あるいは島への讃歌である。レアオの自然に対する讃辞や土地の名前を歌いあげる。数え歌のような形をとるものもあるが、これはペヘトロと区別がつかない。元来、ペヘトロというのはチャントのカテゴリーに入れるべきものでなく、歌い方、テキストの構成から分類された名称かもしれない。ファカタラはかつてはカヌーのような財産に対して吟唱されたという。また海亀を捕える呪文として歌われたことも屢々あったという。レアオで呪文として歌われたチャントは、今日では全く拍子が欠けていることが多かった。人々に記憶されているファカタラは、現実の生活と関わりを持っているものが多い。例えば地名の認識を人々に与えるチャントがある。

fakatara 1

Taku moe i nanea, taku moe i nanave
taku moe i haka ara hia
e Kuriri te manu tai navenave
ka napanapa te tai Taverohia
te ara i Peregaihe ra e
o Teroma e
o Teroma tena, o Terahu
o Teniupiako, i Tegakohonu
Tepuakirikiri
e marae Poureva tahua Fareroa
tika haga no taku rava e

深いねむりにおち、まどろむ
やがてクリリに目ざめる
鳥が喜々として羽ばたく
タベロヒアのまばゆさ
ペレガイへにつづく道
テロマよ
テロマにつづくテラフ、ニウピアコ
ガコホヌ、テプアキリキリ
ポウレバのマラエよ
ファレロアの広場
われら 船出をまつ。

fakatara 2

He manava, he manava !
he tetoko, he tetoko !
ke higa mai korua tahaki nuku
ke fono mai korua tahaki nuku
ke hoa ia ki te tua o Atea
tei hea te puna nei
tena, tena te puna
tei hea Takurua ma Takero e puna
teie Takurua ma Tekero e puna
Kotaha um mea te manu
e putai'i takare rika tu to tira
Kauraka ho mai o maru ki kite

おゝ神よ、われらに恵みを給え！
いづこそ！ いづこそ！
陸に向ってくれまいか
陸に近づいてくれまいか
神の国から大きなひびきを立て
カメはいずこにその姿を、
カメはそこに姿を現わす
タクルアとタケロはいづこそ
ここにタクルアとタケロが姿を
赤い胸を見せコタハが舞う
流れるカヌーに近づきマストから舞上る
二匹のカメをまもり給え

tiraki o mata rāgi
fakarua, fakatere ki te nuku
kia tau e

大きな目を空に向けて
風が^{おか}陸にみちびく
カメよ、来たれ^{おか}陸に

カメの季節は7月から12月にかけてで、その肉は最も賞味されるだけでなく、儀礼にとっても欠かせなかった。神への犠牲としてカメが捧げられた。東ポリネシアでは石造建築物にマラエ marae がある。これは儀礼をおこなう場所で祭壇をもち、石を積み重ねた台状のものから段丘状に作られたものもある。環礁では石がないため珊瑚板 (coral slab) が利用されていた。レアオでは36か所に50余りのマラエが確認された。レアオのマラエ・テアレロの前面に外洋に向かって1.2×1.5×1.5mの大きさの珊瑚板が積まれている。スーラによるとツアモツ群島では広く見られたという。これは小型の祭壇のようなもので、ここでカメの到来を神に祈って呪文を唱えたという。カメを見つけるや、祭壇から離れて捕えにいく男にファカトラ(2)のような呪文が与えられた。⁽³⁾

タラバは英雄や名祖の讃美に歌われるチャントであるが一本調子である。これは他島からの来客の歓迎や儀礼の折に歌われた。タラバは他のツアモツ群島のチャントにはないがレアオでは豊富である。以下のタラバは来島者の歓迎に歌われていたが、筆者の滞在中、政府高官の来島に名祖の名を次々替えて最後に高官の名を入れるといった現代化されたものであった。しかし、レアオの人々はこの逐語訳は全くできなくなっていた。hume ake とは昔、カヌーでやってきた人が上陸に先立って、先ず新しいふんどしに取り替えることである。それから儀式が始まる。それが今日では歓迎の幕あけを意味する言葉となった。Rogonui はポリネシア人の神で名祖の一人である。この名を Ruahatu, Togamea など名祖の名に替えて歌われる。これらの名祖について古老たちは遠い昔の祖先だという以外の説明はできなくなっている。

tarava

Hume ake Rogonui tana maro perapera
e tiki makohi ere ere i
ki te rerere i ki ana te atahi
kai ki koutou pahiki nui
toho iho rāgi e
kepu e kepu e haka hiohio
na ruga taku vahi ki te maro riu e
kiekie pahao
a maro nei roto i aoragi
i roto i te tupua
i te pou nei ei maro ihi i

ログヌイがマロ (ふんどし) を外す
マコヒをむさぼり喰う
なんと不思議なこと
も一度動く
大きなパヒキ (魚) を食べる
ラギをおさめる
腰帯をつけ
パヒの上でマロをかえして
腰帯にとどかせ
マロをかえして
下に戻す

ファカテニは元来、勇敢な戦士、あるいは偉大なる先祖を賞揚する頌詩である。タラバとは詠唱の仕方に違いがある。ファカテニは特にテンポの変化が著しい。ファカテニは通常カイトー（武将）の面前で歌われた。また島毎、あるいは島の名門の家族が彼ら自身のファカテニを持っていた。

fakateni

Tu te tira ma te fara	帆柱に帆桁をつけ
haka tika to kie	帆を真直ぐはる
e pua ra te nono	ノノの繁る
e kamara e nunui e Vavau	火の燃ゆる偉大なるババウへ
e pua ra te nono e	ノノの繁る
tu Ruahatu i tana pahi	ルアハツが帆をあげる
te ahi ri paka	彼の力を頼りに
tena peu rikiriki kapokapo te arofa	水をくみだす
tana pahi kia tupatu	船は暗礁をのりこえる
tana hoe te rivariva iti e	彼は漕ぐ、しぶきをあげながら。

パリパリも島や故郷への讃歌であるが、これは繰返し手拍子を取りながら歌われる。

paripari

E fenua ra i te puroro	風が島に吹きつける
Reao roa taha ia e	レアオはそこに横たわる
ua heke tahuna tiki	チキが波間に姿を消し
ua tika Reao roa taha ia	レアオがそこに浮かび上る
tika haga no Taihopu	はるか彼方にのびるわが島
tu te hau ariki e	偉大なるアリキ、タイホプ
	岸辺に出でぬ

筆者の調査中、ファカアリキはもはや採集できなかったが、バローによると言葉はアリキの称号が与えられる男が就任する儀式にちなんだもので、踊りもアリキ（首長）の超自然的、一時的な力を確認するためだという。⁽⁴⁾短いスタンザに長い折返し句のある型は、レアオのチャントに共通してみられる。この折返しは何度もそのまま繰り返され、屢々スタンザ自体よりも長いことが多い。レアオのチャントで最もユニークといえるのは数え歌でその数が多いことである。これも短いスタンザといった特徴をもつが、そこにおさまる語は数に限らず列挙される一連のものであり、風、鳥の名、身体の部分や家屋の部分が謳いあげられる。この型式をふむものはペヘトロ

と呼ばれる。系譜を謳いあげるロゴロゴについては、もはや誰も思い出さなかった。恐らくキリスト教への改宗後、一番先に消えたチャントであったかと察せられる。

pehetoro 1

Te hua te Kenahio	ケナヒオが巣ごもる
koia haka oti a	卵を産みおえて
e mau pekepeke	鳥が羽ばたく
e te manu peke atu	鳥は行きつ
e te manu peke mai	戻りつ
e te manu roro a	輪をえがきつ飛ぶ
te rua manu, te rua manu	やがて巣をめざし
roro a	舞い下りてくる

Kenahio という鳥名が Kotuku, Kotaha, goio, Kirahu と珊瑚礁に巣をもつ種々の鳥の名に変えて歌われる。古老が一語一語の意味はわからないが、ペヘトロの代表的なものとして次のチャントを歌った。uru は体全体をさすが、この語のみが額、目、鼻、口、顎、手、肩、胸、顔、背、へそ、尻、膝、足、足指にまで変えて歌われる。

pehetoro 2

E kura e taku uru	さあ、体を見せよう
e kura ha o rii rii i	すべてをあけて
e kura e ahu a hukura ha	一つ一つ見せよう
e kura e ahu a hukura ha	一つ一つ見せよう
o rii rii i	さあ、
e kura e tahiti i tahiti	順をおって見せよう
na ruga na raro	上に、下に
atu a hukura ha, o rii rii i	先ず見せよう、さあ
a hahere kui i	どんなもの！

チャントの機能について古老たちから明確な説明を聞くことはできなかったが、バローが調査した他島のチャントから次のような機能があったことがわかった。1) 詠唱者の興奮や感動の表現でそれを聴衆とわかちあう。その感動は宗教的な感情の高揚が多かったと考えられる。2) 呪文による呪術的な効力をわかち与えること、3) 仕事への結束と、その喜びの表現、4) 様々な教訓をチャントに含ませ、謳うことにより記憶づける。そのためスタンザ、あるいは区切りが標語で終ったり、次の出だしの言葉として意味をもたせるものがある。5) チャントを通して出来事を告げる、

6)生産や感謝を通して、純粋に審美的な楽しみに謳われたものなどである。⁽⁵⁾

レアオの島民の間で喜怒哀楽はすぐ歌になっていった。レアオの文化でも歌うこと、詠唱は“偶発的なもの”と説明される。人々が興奮した時にはいつでも歌になるということである。第二次大戦後、レアオにタヒチのモダン音楽が入り若者たちに歌いだされて以来、チャントは歌われなくなった。ポリネシア人の替え歌や編曲はよく知られていることであるが、レアオでの替え歌は外から入ってくるタヒチ音楽だけでなく、讃美歌の影響が伺える。レアオの古老たちが子供の頃、親から「レアオの土語を忘れよ、パウモツ語（ツアモツ語）かタヒチ語で歌え」といわれてきた。外界との接触が少ない辺境の環礁では物質生活が貧しく、その上、言葉が通じないことからタヒチ人たちに“未開人”扱いされたレアオの人々が子供たちに残した言葉であった。こうして、レアオで音程の短い従来のチャントに代って近代チャントが生まれていた。昔のチャントの言葉が新しい言葉に替えられているもの、歌詞はレアオ方言でありながらメロディーが西洋的になっているものもある。近代チャントは中年以上の島民なら歌えた。1970年代に聞かれたこの種のチャントも、もはや聞かれなくなったのである。

チャントの消えた背景

チャントを収集したレアオは78の環礁から成るツアモツ群島の東端、南緯18°28′、西経138°48′の位置にある。この島はプカルアと共に文化人類学的にも形質人類学的にも近隣の島々とは異なっていたため、西欧の航海者たちの注目をひいた。レアオの土語は他島の人々にとって理解しがたかった。レアオのルーツがわかるにつれ、レアオの現方言が土語、パウモツ方言、タヒチ語の *lingua franca* であることがわかった。レアオの先祖がいつ頃ガンビエル諸島のアカマルを離れたかわからない。口碑伝承によると、マンガレバの種族との間の戦いで敗れたアリキ（首長）を含む避難者たちが七隻のカヌーで東ツアモツ群島のいくつかの島々に逃げてきたという。⁽⁶⁾18世紀の頃と推察される。この時、アカマル島民が島を離れた可能性がある。以後マンガレバやガンビエル諸島の人々がアカマルへ移住したことも考えられるのである。

マンガレバは火山島で、南緯23°09′、西経134°58′の位置にある。タヒチ島から南東に約1,600km 離れ、孤立していた。マンガレバ諸島はタラパイ、アウケナ、アカマルがマンガレバに隣接している。マンガレバにポリネシア人が移住してきたのは1900年から遡って26世代、1250年頃にいたツルレイの頃と推察される。⁽⁷⁾カソリックの宣教師が南米から到着したときにはテマプテオアが王として君臨していた。王はミッシヨナリーに上陸は許可したものの、彼自身は最後に洗礼を受けている。宣教師たちは王のいるマンガレバ島のリキテアでなく、アカマルに最初の教会を建てた。今日では廃墟となり、無人島同様である。この島がレアオ島民の原郷であった。マンガレバ島の古老はレアオ島民の先祖の出自がアカマルであることを知っていたが、レアオ島民は彼らの先祖がマンガレバ島民と関係があるらしいという程度であった。レアオの系図作りで6～7世代前の先祖にマンガレバから来たことが発見されたが、島民の口から確証はえられない。

問題の言葉はマンガレバの古老に録音テープを聞かせたところ、先祖の話していた言葉とまでわかっては解読には程遠かった。聞いていくうちにマンガレバでも、1930年代半ば以前に新しいマンガレバ方言が生まれており、本来の土語は衰退の一途を辿っていた。マンガレバの土語が話せ、島の口碑伝承が話せるインフオーマントがえられたのはピーター・バックが最後となった。1934年のことである。バックによると、マンガレバ語は東ツアモツ方言、クツク島方言、マオリ方言を合せたような言葉だという。

一方、19世紀半ばにパイオニア・ミSSIONナリーのH. ラバル神父と最初の原住民神父ティリボネが原稿を残していた。原本はカソリック宗派 (The Congregation of the Sacred Heart) の本山があるベルギーの Braine-le-Comte の古文書部に保管された。後にコピーがマンガレバの教会に送られ、1913年に神父の配慮でコピーのコピーがマンガレバ島民の手に渡った。1921年、そのコピーがハワイのビショップ博物館に入った。ビショップ博物館にあるコピーはかなり抄録されたもので、しかも重要な章が欠けているという。それにもかかわらずこの原稿は native text, 即ち first hand の資料を提供するという意味で大変な価値がある。

ある民族が自身の言語を失くすや民族のアイデンティティが失くなるのが常である。地理的に孤立していたマンガレバで何がおこり、言葉が消えたのか？ マンガレバ島民と外来者の接触を辿ってみた。19世紀～20世紀にかけてマンガレバにきた外来者といえばビーチコーマー、カソリック宣教師、天然真珠の採集にタヒチから来た中国人が挙げられる。かなりのビーチコーマーが南米からの船で来ているが、その中で3人が島に定着し大勢の子孫を残していた。その一人 J. Guillou (1799-1876) はカソリックの宣教師たちが上陸した時、すでに居住していたフランス人で1830年頃、南太平洋にきたという。A. Marion と共に“アストロラーブ号”がマンガレバにきたとき、水先案内をしたが大変な悪評をかった。二人共行商のようなことで生計を立てていたらしいが、Marion はマンガレバを去り、Guillou のみが定住した。

次に定住したのはスウェーデン人 G. Carlson (1850-1925) で、母国では宿屋の主であったという。マンガレバでは商売をしていたが、晩年はクック諸島のラロトンガに住み、そこで没している。彼の妻はビーチコーマー、Christian Schmidt とイースター島の女性の間に生まれた。Schmidt (1846-1910) は1880年にリキテアに定住したデンマーク人というが、政府の年報ではドイツ人となっている。彼はイースター島とツアモツ群島で10年過ごした後、マンガレバへ来ている。マンガレバではパン屋、行商、コーヒ商人などをしていた。彼の3人の子供の一人は地元の巡査になり、一人は船乗りとなり1948年タヒチでパペーテ港の初の水先案内となっている。Schmidt には多くの孫がおり、彼らは Carlson や Guillou の子孫と通婚関係を結んでいる。核実験でフランスの軍隊が駐在した1965年以前では、600人余りの島民の殆どが3人のビーチコーマーと血縁、あるいは婚戚関係にあった。ビーチコーマーたちは土語を話し、島社会に溶けこんでいた。

1834年、カソリック宣教団が南米から到着し、島民は初めてフランス語と接触した。聖書学校が開かれたがフランス語は島社会に浸透せず、教会が聖書を土語に訳したり、マンガレバ語の文

法・辞書を編集した。

次に島にきた外来者は真珠の採集にタヒチからきた中国人であったが、彼らはタヒチ語しか話さず、島民を雇用した。同じポリネシア語の方言であるタヒチ語はいとも容易にマンガレバ島民社会に入った。19世紀末のことである。当時住民は1000人近くおり、中国人商人がタヒチやツアモツ群島から移住してき、島民相手の店をもった。

第一次大戦時はフランスが参戦しており、交通機関が一年に1～2回と限られた。戦間期には外部から人が来るよりもむしろ、マンガレバ島民、ツアモツ島民が出ていく機会がきた。ツアモツ群島の西端にあるマカテアの燐鉱開発会社の労働者募集の船が巡航、東ツアモツ群島、マンガレバの人々が賃金にひかれ、神父に奨められて応募したのであった。遠隔地の人々にも外へ出る機会がきた。契約労働のあと、人々はタヒチに寄り近代的な町の生活を見た。彼らは皆、一定期間タヒチに住み、マカテアでえた収入はタヒチで使ってしまった。マカテアで聞いた他島の口碑伝承やチャントを郷里に持ち帰っている。

第二次大戦に入り再び交通機関がとだえたが、戦後はツアモツ群島をまわるコブラスクーナーがマンガレバへ商品を運び、解禁の季節には真珠母貝の買いつけに大勢の中国人商人が来島した。コブラ出荷以外に現金収入のないツアモツ群島の人々が真珠母貝の採集にダイバーとしてマンガレバへ出稼ぎにきた。戦後、カソリックミッションが東ツアモツ群島の無尽の環礁で椰子の植林を始め、中部ツアモツ群島以南の島々から人々を季節移住をさせていた。フランス人所有の椰子のプランテーションにも東ツアモツ群島の人々が契約労働者として、あるいは労働移民として送られていた。戦後の仏領ポリネシアからのコブラの輸出は環礁のツアモツ群島からの出荷に左右された。政府の奨励で増産の一途を辿る一方、コブラ出荷の仲介や島民相手の商売のため、どの島にも中国人がタヒチから移住してきた。このようにして一世紀の間に島民はポリネシア語の多言語と接し、中国人との混血も進んだ。

1960年半ばムルロアでの核実験のためマンガレバも基地の一つとなり、96年までフランスの軍隊が駐留した。約30年の間に人も言葉もすっかり混ざってしまった。今や若者や子供たちはフランス語しか話さなくなった。親とのコミュニケーションは片言のタヒチ語である。核実験が終り、仕事のなくなった者が大挙してタヒチに出た。マンガレバの人口は激減した。今や島民の多くはポリネシア人、あるいはマンガレバ島民としてのアイデンティティはなく、伝統にも関心を持たなくなったのである。小さな島社会ながらタヒチ人社会と同じ運命を辿ったといえる。

エピローグ

マンガレバにしろ、レアオにしろ他言語と接触して一世紀で土語が消滅した。接した言語が同じポリネシア系であるため、方言の混成語が話されるには時間を必要としなかった。それから半世紀を経て、土語で歌われてきた島独自のチャントも消滅した。

筆者が20年余りに録音したチャントの転写は決して満足できるものではないが、レアオ生ま

れの学校の教師がコピーを依頼してきた。レアオ島民でチャントのテキストを作る者が一人もいないという。このような依頼は、人類学者のフィールドで屢々おきていることである。

19世紀半ばに残されたラバール神父やアカマル生まれのティリポネ神父の原稿から古い言葉を拾ってチャントの解読に最後のチャレンジを試みたい。ポリネシア人の文化遺産チャントを一次資料として残すことの意義が大きいからである。

注

- (1) Buck Peter 1939
Anthropology and Religion, P.62
Yale University Press, New Haven
- (2) Burrows, E.G. 1933
Native music of the Tuamotus
B.P.Bishop Museum Bulletin no.109, P.11
- (3) Seurat, L.G. 1905
Légende de l'île Reao
Revue des Traditions Populaires, Tome XX,
no.12, P.307 Paris
- (4) Burrows, E.G. ibid P.30
- (5) ibid,P.56
- (6) Caillot, A.C.E, 1910
Histoire de la polynésie orientale, P.384
Ernist Leroux Editeur, Paris
- (7) Buck Peter 1938
Ethnology of Mangareva, B.P.Bishop Museum Bulletin no.157, P.18